公益財団法人鍋島報效会研究助成
研究報告書　第6号

2014年1月

公益財団法人鍋島報效会

はじめに

公益財団法人鍋島報效会による助成・育成事業は昭和15年８月侯爵鍋島直映公の意志により、「佐賀県下に於ける文化、教育の振興に資し、且つ之を奨励助成すると共に社会事業に貢献」すべく始動され、以来70有余年を費やして参りました。

平成10年６月の博物館「徴古館」における展示事業に加え、平成13年度より一般公募研究助成制度を新設し、分野を問わず郷土佐賀の研究を啓蒙・普及すべく微力を尽くしております。この助成制度は、広く「研究」を奨励すべき趣旨に沿い、研究課題を佐賀に所以するもの全てとし、高校生以上を対象に一般公募をおこない、当会理事会ならびに有識者による選定の上、期間は原則一年として実施しております。研究期間終了の後は研究報告会を開催し、これら研究成果がよく評価の対象となる機会を設けるとともに研究者間の交流にも一助とするべく務めております。

この度、第11・12回の一般公募研究を纏めた報告書第６号を発刊する運びとなりました。これらの優秀な研究成果を広く好学の士に頒つ機会を得たことは、大きな慶びであります。

本報告書の発刊にあたり、着実な成果をあげられた研究者の皆様、、多大なるご指導ご協力をいただいた関係各位の皆様へ、謝意を表します。

平成26年１月

公益財団法人鍋島報效会

理事長　**堤　　清　行**

目　　次

第11回研究助成報告

岡寺　　良「寺院遺構からみた背振山上宮・東門寺跡と中宮・霊仙寺跡の研究」…… 1

松下　久子「肥前磁器における漆装飾の変遷と展開」…… 27

馬場　良平「伊能忠敬測量隊の肥前国（特に佐賀県内）踏査とその足跡を追う」…… 73

平尾　洋美「佐賀仁和加・その系譜と佐賀の芸能」…… 107

第12回研究助成報告

上田（宮原）香苗「売立目録にみる鍋島緞通」…… 135

坂井　清春「唐津藩寺沢氏による領内支配体制の形成

—各支城の石垣と出土瓦の観点から—」…… 165

高橋　研一「鹿島鍋島家文書の基礎的研究

—総合目録の作成による全容把握と課題の提示—」…… 201

報告会講評

公益財団法人鍋島報效会理事　徵古館館長　　高島　忠平　…… 221

寺院遺構からみた背振山上宮・東門寺跡と中宮・霊仙寺跡の研究

九州歴史資料館
岡　寺　　良

はじめに

佐賀県と福岡県の県境に聳える脊振山(1)は、南は佐賀平野から、北は福岡平野から遥かに望むことができる秀麗な山並みを呈しており、古くから信仰の対象となってきた北部九州を代表する霊山である（写真２）。

現在は、山頂部付近には航空自衛隊のレーダー基地があり、休日には佐賀・福岡近郊からのハイカーやドライバーが行楽に来る山としても知られている。また、歴史的には江戸時代に福岡藩と佐賀藩の国境論争の舞台となったことでも有名である。

しかしながら、この脊振山にはかつて山頂部周辺には上宮東門寺が、坂本峠の佐賀県側には中宮霊仙寺があり、性空や栄西などの全国的にも有名な僧侶が来山した、北部九州を代表する一大法域であったことはあまり知られていない。

山岳霊場としての脊振山については、古くは文献史の立場から、川頭芳雄によってまとめられた著書があり（川頭1974）、現在でも脊振山の歴史を知る上では重要な文献となっている。また、考古学的な調査としても、山頂付近では、脊振村教育委員会により昭和62年（1987）に脊振山経塚群として、経塚と中世墳墓の発掘調査が行われている（脊振村教育委員会1988）。また中宮・霊仙寺跡でも、東脊振村教育委員会により経塚・墳墓・坊跡・中世石造物等の発掘調査が行われ（東脊振村教育委員会1980）、村指定の史跡（現在は吉野ヶ里町指定史跡）となっている。

以上のように、脊振山に関する調査研究は行われているが、考古学的な調査や関心は、やはり経塚や墳墓、出土陶磁器や石造物など、寺院のごく一部の属性にとどまっており、霊仙寺跡の測量図を除いては、寺院遺構全体の構造を捉えるような調査・研究はほとんどなされていないのが現状である。

そこで本研究では、寺院遺構の全体像を捉えるため、城館跡の調査で用いられる縄張り調査の手法を採り入れ、東門寺跡および霊仙寺跡の境内平面図を作成し、そこから両寺院跡の平面構造を検討する。そしてさらには、過去の発掘調査で出土した遺物や自身の調査において採集した遺物についても検討を加えることとしたい。

また、近世における両寺院の実態の一側面を探る意味も含め、霊仙寺跡の近世墓碑銘の調査も行った。その報告、検討もあわせて行うこととしたい。

これらの調査結果を総合し、かつて背振山として知られた東門寺と霊仙寺の実態を寺院遺構から明らかにすることを本稿の最終的な目的としたい。

１　山岳霊場としての脊振山の歴史と位置

（１）全体概要（図１）

脊振山は標高1,055mの山頂部を頂点として、その山並みは、東は佐賀県鳥栖市と福岡県筑紫野市の

「肥前磁器における漆装飾の変遷と展開」

長崎県文化振興課
松　下　久　子

はじめに

有田窯を中心に焼成された肥前磁器は、17世紀後半に海外への輸出が本格化し、東南アジアやインド洋周辺地域、南アフリカ、ヨーロッパ、アメリカ大陸など広範囲にわたって流通した[1]。そして今なお世界各地に伝世している。中でも、ヨーロッパの王侯貴族によって収集されたコレクションは、質・量ともに充実しており、日本でも書籍や論文[2]、展覧会等で紹介されてきた。そうしたコレクションの中に、漆で装飾を加えられた肥前磁器が見うけられる。黒漆や金彩を多用し独特の豪華な雰囲気を湛え、ひときわ目を引く存在である。

そのような漆装飾磁器に関する先行研究の例はあまり多くなく、陶磁研究者の間でもあまり注目されてこなかったようである。漆装飾磁器について、最初に本格的な検討が行われたのは、アンソニー・デュ・ブーレイ氏による、英国ヨークシャーのノステル・プライオリー（Nostell Priory）というカントリー・ハウスのガーニチャー[3]を紹介した記事である[4]。彼はまず、漆装飾磁器の早い例として大英博物館が所蔵している万暦年間(1573-1619)の景徳鎮製方形瓶を紹介し、さらに、ノステル・プライオリー所蔵の有田製漆装飾ガーニチャーについて､「中国のアイディアで日本の職人技が生み出した印象的で珍しいガーニチャー」と評し､「17-18世紀の北部ヨーロッパにおける王侯趣味を表象している」と位置づけている。2003年に展覧会図録として発行された『黒い磁器－漆に対する熱狂とヨーロッパ磁器への影響』[5]には、漆工や陶磁史、室内装飾を専門とするヨーロッパの研究者たちによる研究成果がまとめられている。その中では、東洋の漆器に対する人気の高まりを背景に漆装飾磁器が求められ、さらに18世紀から19世紀にかけ中国やヨーロッパ各地の窯場で黒釉に金彩や色絵を施した磁器が製作された実態を明らかにしている。一方、櫻庭美咲氏は、来歴の明らかな漆装飾磁器やそれに類する製品の調査を通して、それらがヨーロッパ有数の王侯によって所蔵されていることから、格別に高く評価されていたことを指摘している[6]。そして、より付加価値の高い磁器を所有し、自らの磁器コレクションの格の向上を図ろうとするトップクラスの王侯の求めに応じるため、漆を連想させる黒塗りの肥前磁器が生み出されたと推測し、ヨーロッパ宮廷における根強い漆黒志向があったことを示唆している。

このように、肥前産の漆装飾磁器については、消費地であるヨーロッパにおける文化史の文脈の中で扱われてきた。しかし、日本における漆装飾の生産の実態や技術的変遷については、未だ不明な点が多い。そこで本稿では、伝世する漆装飾磁器の調査を通して、江戸から明治時代にかけて作られた肥前磁器における漆装飾の実態を探ると共に、技術的な変遷と展開を明らかにしていきたい。具体的には、漆装飾磁器を江戸前期（17世紀～18世紀前半)、江戸後期（18世紀後半～19世紀中頃)、明治期（1868-1912）の３期に区分し、加飾された陶磁器の産地と漆装飾の特徴および加飾地について考察する。また、江戸前期の肥前磁器の漆装飾をきっかけとして、陶磁器の装飾手法がどのように展開したのかについても確認したい。

伊能忠敬測量隊の肥前国（特に佐賀県内）踏査とその足跡を追う

塚崎・唐津往還を歩く会
馬　場　良　平

１．はじめに

私が街道や往還沿いの歴史や文化に興味を持ち始めたのは、平成12年（2000）２月、『歴史街道を歩く会』を主宰する河島悦子氏の「唐津街道を歩く会」に参加してからである。

振り返って思うのは、当時はちょうど50歳になる数か月前で、職業人としての先行きが見え始めた頃で、社会人としてのストレスからの逃避先として街道歩きに興味を持ち始めたものと思う。

私の街道歩きは歩く仲間との素晴らしい出会いもあり、また、古街道愛好者らの後押しを受け、平成14年（2002）10月『中世の風景が広がる歴史道』をキャッチフレーズに「塚崎・唐津往還を歩く会」を発足した。それから丸10年、唐津から塚崎（武雄）までの塚崎往還（塚崎から唐津へ向かっては唐津往還と呼ぶ）を中心に、主に佐賀県内西部地区に繋がる街道や往還などを歩いて来た。各地に繋がる街道や往還を歩いていくと必ず伊能忠敬が足跡を残している。

折りしも平成24年（2012）は「伊能忠敬肥前国測量から200年！」の節目の年に当たる。伊能忠敬の測量隊は文化９年（1812）８月17日、筑前国より包石坂を越え肥前国に入り、肥前国測量の旅を続け、同10年平戸、壱岐、対馬、五島列島の測量を終え、長崎からの帰府の途、９月21日佐賀領内に入り、同29日筑前国に進んで行く。伊能忠敬67歳から68歳の時である。

この200年の節目に「伊能測量200年」をたたえ、伊能忠敬測量隊が残した測量日記や県内各地に残る文書から踏査ルート、唐津藩や佐賀藩の対応、また、その後の佐賀と伊能忠敬の関係などを研究し、伊能忠敬の人物像や伊能図の成果を追ってみたいと思い研究に取り組んだ。

２．伊能忠敬とは

江戸時代の測量家・地理学者として、わが国、最初の測量地図「大日本沿海輿地全図」を完成させた人物で、千葉県の歴史上の人物として、日蓮上人と並び称される伊能忠敬は、日本の代表的な歴史上の人物でもある。

伊能忠敬（1745－1818）は延享２年（1745）上総国（かずさのくに）九十九里浜に近い小関村で生まれ、幼名は三治郎と名乗っている。幼・少年期には母親の死亡、父親や兄弟との離別があったが、10歳から父親の実家、小堤（おんずみ）に戻り父親のもとで青春時代を過ごしている。下総国（しもうさのくに）佐原の酒造家・伊能家へ婿入りしたのが17歳の時である。相手は子持ちの未亡人、21歳のミチ。婿入りの時、林大学頭の門人になり、「忠敬（ただたか）」という名前をもらい、以来忠敬と名乗

伊能忠敬銅像・富岡八幡宮

佐賀仁和加・その系譜と佐賀の芸能

公益財団法人佐賀県芸術文化協会
平　尾　洋　美

序

新劇系の現代劇に携わる私にとって、ショッキングな出来ごとがあった。

「神戸連続児童殺傷事件」の酒鬼薔薇聖斗の神戸新聞社に送った犯行声明文は、演劇台本を連想させる形態と内容であった。

その後、野村證券、大和證券、日興證券とともに日本の「四大証券会社」の一角にあった山一證券株式会社が、不正会計（損失隠し）事件後の経営破たんによって平成９年（1997）に廃業したが　社長の「社員に責任はない、すべて社長の私に責任がある」と云う記憶に残る、涙の記者会見は芝居より迫力があった。

オウム事件が起きるが、教祖・麻原彰晃が救済の名の下に日本支配を空想し、それを現実化する過程で、ハルマゲドンを起すための地下鉄サリン事件を始めとする無差別テロを実行した。

当時、第三世代の演劇が主流を占め、70年代後半頃から本格的な活動を始めた世代を指し、野田秀樹・渡辺えり・木野花・鴻上尚史・如月小春・川村毅などメタシアターを駆使した、技巧的で遊び心を生かした作劇術が特色で、近未来・架空の世界を舞台にした作品が多かった。

北村　想　作「寿歌」は、近未来、核戦争で全てが瓦礫となった世界を描いた作品。

「天使は瞳を閉じて」鴻上尚史　作は、「見えない壁」によって隔離された男女が、そこから脱出しようとしているときに、外部で原子力発電所の事故が起こり、世界が終わってしまった、という展開だった。

＜ハルマゲドン＞後の近未来から現代を逆照射する「演劇的虚構の世界」をオウムは現実にハルマゲドンを実行しようとした。芝居という「虚構の世界」を凌駕する一連の事件は、演劇を表現手段とする私に戸惑いを与えた。

佐賀美術展覧会の審査会場で審査員が「３．11　東北大震災」後の美術界の傾向が変わってきたと話された。従来の芸術活動が見直され始めている。

そんな私が、演劇を見直す原点が「にわか」の存在だった。

１、俄の源流

俄（にわか）とは、江戸時代から明治時代にかけて、宴席や路上などで行われた素人の即興喜劇。

仁輪加、仁和歌、ニ和加などと表記する場合もあるが茶番ともいった。

「俄」といわれる民衆の芸能は、時代や土地柄で芸の形態に違いはあるが、江戸中期から明治かけて、京都・大阪・江戸吉原・博多などで盛んに行われていた。大正時代になると京都・東京では、ほとんど姿を消し、大阪と博多など九州の俄が残った。大阪では、命脈を伝える程度で、変貌しながらも博

売立目録にみる鍋島緞通

国立大学法人　佐賀大学美術館（嘱託）
上　田　香　苗
（宮原　香苗）

はじめに

調査に至る経緯は、以下のとおりである。

佐賀県立博物館では、昭和52年「鍋島更紗・段通展」が開催された。

この展覧会は、佐賀の染織工芸品である「鍋島更紗」と「鍋島緞通」の実態を広く世に問うた画期的な企画であった。江戸時代に鍋島藩の献上品として重用された更紗と緞通は、ともに藩からの注文により製作した非売品であった。今でこそ「鍋島」と冠しているが、いずれも江戸時代に「鍋島」と記載した例はなく、更紗は「高麗更紗」・「半兵衞更紗」、緞通は「花毛氈」であった。明治時代に内国勧業博覧会などに出品するため、原産地を強調し「鍋島」をブランド名としたものだ。

企画展の成功を受けて、佐賀県立博物館では「鍋島更紗」・「鍋島緞通」を収集し、積極的に常設展や小企画で紹介してきた。

平成４年、佐賀県立美術館で「鍋島緞通―もめんの華―」の企画を担当し、江戸時代元禄年間に現在の佐賀市嘉瀬町扇町で創始したという「扇町紋氈」(苗運寺「緞通碑」)、現在は「鍋島緞通」として知られる木綿織の敷物を中心に、同じ木綿織の堺緞通（天保２年に創始）と赤穂緞通（明治７年に試織に成功）を合わせて展示し、織の技術や文様の細部が相互に影響し合い発展していく様を紹介した。

平成の企画展では、公益財団法人鍋島報效会所蔵の鍋島緞通14件16点及び鍋島家文庫（佐賀県立図書館寄託）から「済家宗由緒」(明和７年頃)、「泰国院様御年譜地取」(寛延３～文化２年)、「天祐寺町竈帳」(嘉永７年)、「京江戸其外定例御進物附控」(安政２年）の展示許可をいただいたことで、「鍋島緞通」に対する注目度が上がった。

しかし、前述「京江戸其外定例御進物附控」には鍋島本藩から年始の挨拶に公方（将軍）・大納言（将軍の継嗣）以下老中などへ贈られていた記録があり、数え上げた「花毛氈」は公式数のみで毎年55枚、これが贈答先あるいはその関係筋に残っているのではないかとの指摘を受け、調査をするが古写真の記録が散見するのみで、「花毛氈」や「緞通」の現物には手が届かず終わった。

江戸時代の製品ではないかと推定した緞通の新発見もあった。財団法人遠山記念館所蔵の鍋島緞通（２件２点)、現在は赤穂市立美術工芸館田淵記念館所蔵の緞通（２件２点；江戸時代の塩問屋田淵家旧蔵）及び個人蔵（数件）である。いずれも佐賀県内に現存する緞通に多く見られる主文「蟹牡丹文」が複雑に意匠化されており、通常縁文に使われる大小の雷文を組み合わせた二重雷文ではなく七宝繋文、山形文などこれもより複雑な縁文で飾られている。房を除く長尺が180cm前後と小形であり、文様となる色糸は短く（10～15㎜)、比較的織りが粗いため、一畳物の重量は2.0～3.0kg前後と軽い。植物染料染め、手紡ぎ糸を使用する。

比較基準となるのは、明治時代に販売目的で製品化された「鍋島緞通」で、長尺190.0cm前後、文

唐津藩寺沢氏による領内支配体制の形成
―各支城の石垣と出土瓦の観点から―

唐津市教育委員会生涯学習文化財課
坂　井　清　春

１．はじめに

佐賀県唐津市に所在する唐津城を本城とした唐津藩初代寺沢志摩守広高は、文禄四年（1595）に唐津に入封し、６万３千石を領有した。慶長五年（1600）の関ヶ原の戦いの戦功により天草４万石を加えられ、さらに慶長十九年（1614）には怡土郡2万石を得て、12万３千石を領有する大名へと成長した。慶長七～十三年（1602～1608）には唐津城を築城し、これにあわせて唐津城下町の整備、松浦川の改修、虹の松原の保護、新田開発、支城整備等を行ったと伝えられている。寺沢広高の跡を継いだ兵庫頭堅高の頃、寛永十四年（1637）に天草領内で勃発した天草・島原の乱の責を問われ、天草４万石が没収される。堅高が正保四年（1647）に没すると、嗣子がいない寺沢氏は断絶してしまうことから、寺沢氏の頃の様子を伝える一次資料が残されていない。このため、領内支配の拠点となる支城の整備についても、不明な点が多く残されている。

近年の縄張調査により、領内城郭の状況を全体的な視点で把握されるようになり、さらに発掘調査事例の増加により、寺沢氏により築かれた各支城の様子が徐々に明らかになってきている。支城整備を行った事例として、天草の富岡城跡が以前より知られており、また獅子城跡の発掘調査により、寺沢氏により獅子城が支城として再整備されたことが明らかになっている。この他にも、唐津地域（松浦郡東部）と天草地域（天草郡）に、寺沢氏により支城として整備された城郭群が存在することが指摘されるようになってきた。しかし、支城としての存在自体が不明瞭な城郭もあり、唐津藩領内全体を包括した視点からの検討は、未だ発展途上であると言わざるを得ない。

城郭研究では、近世城郭の直接の原型となった、いわゆる「織豊系城郭」には、その特質として、石垣・瓦・礎石建物が伴うことが指摘されている(1)。ただし、この状況は本城クラスの城郭を指したものであり、近年では、これらの問題点も踏まえて整理し、支城における状況を把握しようとする動きが見られるようになってきた(2)。九州地方でも、主要な支城での発掘調査成果をもとに、三要素の採用の状況が整理されている(3)。また、出土瓦の分析により、本城と支城の関係を明らかにする試みも成果を上げている(4)。

そこで、寺沢氏により築城されたと想定される城郭群を対象に、現地に残る石垣と発掘調査等で出土した瓦から、唐津藩寺沢氏によって築かれた支城群を整理し、領内支配体制形成の状況を検討してみたい。

２．唐津地域（松浦郡東部）の城郭の概要と石垣の状況

寺沢氏入封前の唐津では、岸岳城主であった波多三河守親を盟主とする上松浦党が支配していた。豊臣秀吉による文禄・慶長の役（1592～1598）に先立ち、天正十九年（1591）に肥前名護屋城が築城され始めると、全国120余りの諸大名が東松浦半島の先端に位置する名護屋に集結し、陣を構えた。名

鹿島鍋島家文書の基礎的研究
― 総合目録の作成による全容把握と課題の提示 ―

鹿島市民図書館
高　橋　研　一

はじめに

（1）本研究の動機

本研究の目的は鹿島鍋島家から流失し、県内外の所蔵機関に分散した鹿島鍋島家文書の総合目録を作成し、その課題を提示することである。本論に入る前に、本研究を必要と痛感するに至った動機を長くなるが述べておきたい。

個人が研究課題を設定し、自ら各地で史料を採訪し研究することが歴史学研究のなによりの基本である。しかし、研究者あるいはそれに準ずる人物においてさえ、史料の情報を十全に収集することが難しいのが現状である。そのため、居ながら各地の史料を複製で閲覧できる研究機関や目録整備が行き届いている史料群に研究者の目も向きがちである。目録が刊行されていない、あるいは目録さえ作成されていない史料、また所蔵者のもとから散逸したため分散所蔵されるに至った史料は研究対象として敬遠されることになる。

そこで、魅力ある史料環境を提供することによって、研究者を惹きつけ、その研究の成果を地元に広く還元することで、新たな研究者を惹きつけるとともに、郷土史家による研究の活性化や地元の意識向上につなげることはできないだろうか。日々地域の史料の現状に直面している立場として、専門の研究者と地元の郷土史家の研究が互いに刺激・共鳴しながら、地域史の活性化とその裾野の拡大を図るために何ができるだろうかというのが本研究の切実な動機である。

また、副題に「課題の提示」という文言を入れたのは目録のみを提示することだけでは、地域史研究の活性化を促すうえで有効ではないのではないかと感じているからである。県内でも行政や研究機関によって数多くの文書や典籍の目録が作成されている。しかし、これまでそうした目録が地元でどれほど有効に活用されてきたのであろうか。

鹿島に則して述べると、鹿島に所在する黄檗宗寺院福源寺の蔵書目録が2012年に佐賀大学地域学歴史文化研究センターによって刊行された(1)。福源寺蔵書目録を丹念にみていくことで、福源寺の蔵書は地方の黄檗宗寺院における蔵書が地域に支えられながら形成された過程を示すだけでなく、鹿島藩内における蔵書の往来を通して鹿島の蔵書文化を解明することができる大変魅力ある史料群であることがわかる。しかし、残念ながら福源寺蔵書目録の刊行が行政や地元の人々に新たな展開をもたらすには至っていない。

そうした現状を踏まえると、目録作成によって役割は終わった、後は地元の努力次第という姿勢では、目録の有効活用や地域史の活性化に結びつかないのではないか。目録を有効に活用することによって得られる知見の可能性をも同時に提示しておく必要があるのではないかと痛感するに至った。すなわち史料群の可能性を提示することによって、より広範囲な人達の利用・研究を促進し、地域史の活性化につなげたいというのが本研究の副題に込めた思いである。

本研究の動機を長く記したのは、本研究は鹿島鍋島家文書を具体的な題材としているが、その作業の

第11回・第12回　授与式・報告会の様子　（於 徴古館）

平成23年４月６日
第11回研究助成　授与式

平成24年６月２日
第11回研究助成　報告会

平成24年4月6日
第12回研究助成　授与式

平成25年6月1日
第12回研究助成　報告会

公益財団法人鍋島報效会研究助成
研究報告書　第６号

2014年１月

発行　公益財団法人鍋島報效会
佐賀県佐賀市松原二丁目５-22
TEL/FAX 0952-23-4200
URL:http://www.nabeshima.or.jp
印刷　㈱佐賀印刷社